

博物館で釧路の魅力再確認

平成25年4月より釧路市役所に採用され、博物館に着任となりました金山潤と申します。私は釧路市生まれの釧路町育ちで、現在も釧路町に在住しております。釧路北高校を卒業後、進学・就職で上京しましたが22歳で釧路に戻ってまいりました。その後、家業である農業を手伝いつつ仕事を探し、某薬局に就職、その後7年ほど勤務し去年、市職員に採用され現在にいたります。

私が博物館に着任しての思いや、感じたことをお話ししようと思えます。博物館のイメージは、大変に失礼ながら「小学生の社会見学場所」というものでした。自身、小学生以来の博物館体験だ

だったのでそのイメージが強いのかもしれません。

実際に勤務してみると、もちろん社会見学以外にも様々な人々、団体が博物館にいらっしゃいます。みなさんの知識と言ったらそれはスゴく、自分が全く釧路の街のことを知らないということを痛感しました。湿原、炭鉱、遺跡など色々な文化的価値のあるものがたくさんあり、釧路がこんなにも魅力あふれる都市だということを再確認し、日々学んでいます。

私は事務職員なので事業の開催時なども事務室におり、あまり見ることができないのですが、マンモスホールで行う特別展は1ヶ月以上の長期にわたっての開催なので、休憩中にちょっと見学。毎回学芸員が思考を凝らしての展示は

担当者のカラーが出ていて楽しみにしています。当時、実際に使われていた道具や、動植物の標本など貴重な実物資料を目の前で見るなどの体験し知識を深めることができましたと思います。こういった事業を通して、市民の方々に、生涯学習の場を提供している博物館は重要な施設だと最近強く感じています。

もうすぐ、博物館勤務になり1年が経とうとしています。まだまだ不勉強で皆様にご迷惑をお掛けすることが多々あると思いますが、これまで以上に努力、研鑽してまいりますので、ご指導ご鞭撻のほど、よろしく願いいたします。

(金山 潤)

スカイランド解体

現在、博物館1階マンモスホールで行われている企画展「釧路炭田の炭鉱と鉄道」は、もうご覧いただけましたか。

今回の展示は、鉄道のある風景を通して、炭鉱に生きる人々の姿を余すところなく映し出した構成になっています。筆者にとっても、今でいう「撮り鉄」の端くれだったことや何よりも「ヤマ育ち」であることを思い出させます。

ある日の通勤時間帯、普段の風景にトゲの様な違和感が走りました。車窓に一瞬過る程度でしたのでしばらく正体不明でしたが、それは青雲台にある旧太平洋スカイランド本館の解体工事でした。

「太平洋炭礦株式会社50年のあ



ゆみ」によると太平洋スカイランドは1968(昭和43)年に発足した同社の福祉組合が建設したもので、翌年5月のオープンとありました。本館は円筒形で施設の正面入口になっていました。また、内部は吹き抜け構造で各階のレストラン・宴会場・ホールなどへのらせん廊下を備えていました。

最上階は展望台だったと記憶しています。そのほかにゲームコーナー、ゴーカート場、後年には坑内温廃水を利用したプール、ボウリング場、ホテルなどが順次追加され、50年誌では「福祉の殿堂」として紹介されています。

らせん廊下と言えば、今では子供たちの歓声が響く遊学館の専売特許ですが、筆者と同世代のヤマっ子には「元祖はこちら」と思われるかたも多いのではないのでしょうか。

2002(平成14)年に炭礦展示館を除き閉園になりましたが、本館は炭住街のランドマーク的な存在の様にとり残されていました。

解体工事は長いアームをもつ重機によって行われていますが、構造上なのか、造作が堅牢なのか、はたまた最後の抵抗なのか、見て思うほど進まないようにも感じられます。

石炭のにおいを感じさせる風景がまた一つ消えようとしています。

(石川 朗)